

とどけ

おばあちゃん

ハルモニの声



2020年5月15日

戦争責任

他から問われて感ずるものではない、
自らに問うて意識すべき罪。

忘れてあげようといってくれても、
時効にしてはならないもの。

信頼の源。

今村嗣夫

「戦後補償立法を準備する弁護士」の会・座長



三菱重工株式会社

取締役社長 泉沢清次様

すでに御存知と思いますが、5月6日、原告李東運さんが逝去されました。昨年1月から4人の原告が解決を見ることなく帰る人となりました。5月7日のお別れの会には青瓦、国家人権委員会、ソウル市長などから弔電が届けられ、地元の新旧国会議員、光州市長、光州教育監などが弔問に訪れ、マスコミも全国紙を含め30社が報道し、徴用工、挺身隊問題に対する国家、市民の関心の高さに驚かされます。梁錦徳さんも参列されましたが非しみに加え体調もすぐれず、途中で退席されたとのことでした。右欄は、日本の裁判所で匿名陳述された李東運さんです。何故匿名なのかは貴社が充分御承知だと思います。

先日は、とてもよい報道がありました。インドで白血病の韓国人サ見が日韓の協力で帰国出来たとのこと。今この様な精神、生かされるべきではありませんか。

2015年7月、故岡本行夫氏から三菱マテリアルの代理として米国に赴き「事業を継承する会社として道義的責任を感じている」戦時中の補償に対して謝罪されています。更にマテリアルは翌年6月、戦時中の中国人労働者3765人と和解しました。

三菱グループは、本年創業150年を迎え、小児達の育成の善未来財団を設立されました。社会への貢献の取り組みだと思います。「サ学校に入れさせてやる」「うまいものを食べさせてやる」「給料も支払う」となされて日本に連れてこられ給料も支払われず、過酷な労働を強いられた原告が貴社を相手に慰謝料の支払いを求め、2018年11月韓国の裁判所でやっと認められました。貴社の社員であった、この少女達にも目を向けるべきではありませんか。

判決から1年半が過ぎ貴社が無視し続けることで、企業発展の阻害要因になることを非常に心配します。決断を要請します。そのことサ社業の発展や国際社会でのイメージの向上につながるのではありませんか。

以上



1930年生まれ
国民学校卒業1年2ヶ月後に動員される

匿名希望の方の陳述から

ずっと胸の中に閉じこめて

挺身隊でのつらい日々が続く中、8月15日を迎えました。戦争が終わったということは工場のラジオで知りました。「これで家に帰ることができる」と、とてもうれしかったです。ただ、一緒に来ていた山本貞禮さんが地震で死んでしまって、私ひとり帰るのだと思うととても辛かったです。自分だけ帰ってきたという罪悪感から、今でも貞禮さんの夢を見ます。小さいときに一緒に遊んだ夢も見ます。故郷に帰ってから、国民学校の卒業写真に写っている貞禮さんの顔をペンでグルグルと塗りつぶしてしまいました。「貞禮さんはもういなくなってしまった」と思ったからです。

郷里の実家に帰ったのは数え年16でした。家に帰ってほっとしました。でも、仕事だけしてお金ももらえずに帰ってきたので、喜んでばかりはおれない気持ちでした。

私の家は全部で7軒ほどしかない小さな村でしたので、村のみんなは私が挺身隊として日本に行ってきたことは知っていました。ですから日本の工場ではペンを塗る仕事をしてきたと説明すると、村の人たちは私の話を信じてくれました。

ところがしばらくしてから、近所の人のうわさ話の中に「処女供出」ということばが出てきました。私の知らないことばでした。よく聞いてみると、挺身隊ということばは「処女供出」と併せて、日本の男性に「身体まで尽くす」という意味で使われていることがわかりました。それで、私が挺身隊に行ったことが「処女供出」と思われているのではないかと思い、挺身隊に行ったことを「恥ずかしい」と強く感じるようになりました。「日本に行ってきたことは誰にも話さないようにしよう」と心に決めました。

次の年、私は結婚しました。花嫁衣裳を着て人力車に乗って行きました。村から少し離れたところに住んでいる叔母さんが自分の家の近くの人を紹介してくれたのです。夫に挺身隊のことは話ませんでした。

日本で撮った写真は、破って捨ててしまいました。夫は53で亡くなりましたが、夫も夫の両親も、私が挺身隊に行ったことは知らないまま亡くなりました。

